



## ラグビーに学ぶ



日本でラグビーのワールドカップが開催され、日本代表の活躍もあって盛り上がりました。私も、日本代表の試合も含め、いくつかの試合をテレビで興奮しながら見ていました。

また、各国の選手や関係者から日本への感謝などが伝えられ、直接かかわっていないのにうれしくもなりました。

### 【左の写真】

日本代表キャプテンのリーチ・マイケル選手が  
*Arigatou for all the support* (サポートをありがとう)  
と添えて自身のツイッターに掲載した写真です。



さて、今回は、他のチームスポーツにはない、ラグビー独特の特徴ある精神などを紹介させていただきます。子どもたちにとっても、私たち教職員にとっても、クラスや、仲間、集団づくり関わる大切なことをラグビーから学ぶことができると思います。

### その1 フェアプレイの精神

常に正々堂々、ベストを尽くし、勝っておごらず、負けて清く。審判は一人しかいないのだから、ごまかして反則することもできるが、絶対にそれをしない。ラグビーでは審判が一番偉いとされ、文句を言うことなどは許されていない。ラグビーは勝つことよりも、いかに立派に戦ったかを評価する。

教員などがあるときとないときで、態度を変える人にいい感じはもてません。誰が見ていようがいまいが、常に、変わらず正々堂々とありたいものです。そういう人を育てたいと思います。

### その2 No Side (ノーサイド) の精神

ラグビーでは試合終了の合図を「ノーサイド」と呼ぶ。ノーサイドとは、激しく戦った両方のプレーヤーが、どちらの側(サイド)も無く(ノー)なり、全員一つの友情で結ばれ、フェアプレイをたたえ、健闘を祝し合う仲間であるという意味。アフターマッチファンクションという、試合後に両チーム選手・スタッフ・レフリー・協会関係者が一同に集い、軽食や飲物を摂りながら交流を深めるイベントもある。そこでは敵・味方なく、お互いの健闘をたたえ合う。

授業中に友達どうしでお互いの考えが対立して討論になったときでも、授業が終われば、仲のいいもとの友達に戻るという関係があると、安心して授業中も言い合いができます。

### その3 One for All, All for One (1人はみんなのため、みんなは1人のために) 自己犠牲の精神

ラグビーの基本精神。個人はチーム全体のために自己を犠牲にし、チームは一人丸となって個人をサポートする。

仲間の困りごとをみんなで心配して解決していく集団に育てたいと思います。また、自分一人ががんばっていると考えるのではなく、いろいろな人々の支えがあって、今の自分があることも感じてほしいと思います。

## その4 キャプテンシー

ゲームが始まってしまえば、キャプテンを中心に選手達自らが責任をもってプレーすることを指す。試合中は監督（ヘッドコーチ）は、ベンチはおろか、グラウンドわきにいることもできず、観客席から見守るしかない。このことは、ルールブックにも書かれている。「プレーヤー、レフリー、タッチジャッジ以外のものは、競技場及び競技区域内に入ってはならない」

チームワークの大切さを物語っています。つまり、キャプテン（リーダー）の存在価値が他のチームスポーツとは違って、とても大きいことが特徴です。授業の主体は子どもたちです。授業が始まれば、子どもたちが主役になって授業を進めてほしいものです。また、授業以外においても教師に頼らず、リーダーを中心に、自分たちの力で取り組める集団になってほしいと思います。

## その5 ラグビーは紳士のスポーツ

ラグビーは、身体の大小に応じたさまざまなポジションが「15」存在するため、どんなプレーヤーにも役割が与えられる。また、ラグビーは雨が降ろうが雪が降ろうが、一度試合をすると決めたら必ず行われる。天候やグラウンド状態は、相手チームにとっても同じこと。ラグーマンは、やると決めたら最後までやりとおす紳士である。また、激しいプレーが信条なだけに、ラグーマンには、紳士的な精神をもち合わせる事が要求される。

それぞれの個性や特性などに応じて、一人一人に役割のある集団、一人一人が活躍できる集団、一人一人に居場所のある集団をめざして本校教職員は努力しています。

…ラグビーは相手に「タックル」することが許されているスポーツです。だからこそ、ルールを重要視し、紳士としてふるまうことが要求されます。タックルされていちいち頭に来ていたら、試合が成り立ちません。また、タックルが許されているだけに、「弱い気持ち」や「恐怖心」が浮かんでしまえば、激しく戦うことができません。そういう気持ちをみんなであっさり切ろうと、ある大学のラグビー部などは、試合前のロッカールームでお互いを殴り合ってからグラウンドに出てくることもあるそうです。選手が試合会場に入場するときは、顔に血をにじませたり、涙を流したりしていることもあるそうです。

楯円球を使うことも大きな特徴です。素直に転がらない、どちらにバウンドするかわからないなど、人生に例えられることがあります。また、ボールを前に投げてはいけないルールも人生に例えられることもあります。ボールを投げるためには、自分がまず前に進んでから味方にパスをしないと、後ろへ後ろへと下がってしまいます。まず、自らが前に進む勇気が必要だと教えてくれているように感じます。



ぼくみたいな体の選手ががんばれば  
これからの子どもたちにも  
メッセージが伝わると思うんです。

田中 史朗（ラグビー日本代表選手）

田中選手は、身長166cm、体重75kgとラグビー選手としては、恵まれた体格ではありません。大会直前に「命がけで戦う」と奥さんに宣言していたといいます。奥さんはそんな田中選手の言葉として「もし俺が死んだら新しいいい人見つけてなって言われてます」と明かしています。奥さんに遺書を残したという話もあります。

ラグビー、ウェールズ代表キャプテンの *Alun Wyn Jones* です。教頭曰く、私に似ているとのことですが、どう思いますか？

